

地域活性化という「遊び」③

京都市
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

面倒なことにはしっかり向き合う姿を
じいちゃんばあちゃんから学んでほしい

夕方中学2年生の次男が8キロ離れた学校から
ニコニコと自転車で帰ってきた。
帰り道は集落の入り口から田んぼに沿って
曲がりくねった登り坂が続くので
いつもは息を切らせて少々お疲れれ
みに帰ってくるのですが



とってもおいしいおばあちゃんのおはぎ

こうしてニコニコ帰ってくる日々
時々あるんです。
「ええもんもらったで」
この一言と次男の笑顔で家族のみんなは大体察しがつきます。
「おはぎ！」
「正解！」
集落に一人すごく美味しいおはぎをつくるおばあちゃんがいて
つくる機会があると
いつもうちの家族分多めに作って
うちの家族が通りがけると畑から
「おーい」と呼び止めて手渡してく
れるのです。
このおばあちゃんのおはぎ
ほんとうに美味しい。
甘すぎず
とてもいい感じに塩も効いていて

甘いものが苦手な僕でも
三つくらい平気で食べちゃいます。
街で売ったら
間違いなく行列ができますよ。

なんでそんなに美味しいかという
まーとにかく手間がかかっている。
あんこを作るのはとても大変です。
ストーブにかけながら炊いては茹で
こぼして煮詰めていくのですが
最後の方はちよつと目を離すと焦げ
ちゃって
全てがパーになってこともよくあるこ
とです。
もっと遡ると
小豆を育てるのが大変。
ちゃんと言うと、育てるのは
あまり難しくありませんが
問題は収穫。
鞘がついて熟するのがバラバラで
収穫が遅れると弾けて地面に落ちち
やいますから



おばあちゃんの畑

熟するごとに少しずつ収穫せねばな
らんのです。
収穫したら干して
脱穀してゴミとって選別してという

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨセフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

まーこれは
そういう時代を生きてきた
おばあちゃんにしかできないだろう
なという仕事です。

■
そういう時代

面倒なことと向き合ってきた時代
とでも言いましょうか。

今はとても便利になって

世の中簡単に！と世界的にすごい速
度で合理化が進んでいます

それでも面倒なことにはしっかり向き合
った時代があったからこそ

できたことではないのかな？

■
僕自身

無駄なこと、面倒くさいこと大嫌い、
新しい発明は大好きで

良い意味での合理化はどんどん進め
ていけば良いと思います

どんなに便利になっても生きていく
上で直面する

「面倒なことにはちゃんと向き合う」
という姿勢は

家族みんなで大切にしたいと思っ
ています。

面倒なことから逃げるということが
最良の選択になることもあります

その判断ができるのも
日々面倒に向き合ってきた

とできると思うのです。

■
学校もほとんどの人が

行けるようになり
塾も大繁盛で

今の子供はとても賢くなってきた
と思います

やる前に「無理!!」というセリフを
よく耳にします。

隣の85歳のじいちゃんがよく言うセ
リフで

「しゃあないな」ってのがあって

やらなければ仕方ないな
という感じの意味ですが

そう言いながらも
僕に言わせても「無理!!」って即答

したくなるほどの山や畑を

毎日コツコツと綺麗に

手入れしている姿には
現代っ子との姿勢の違いが

見てとれるような気がします。

■
以前から考えていたのですが
今年

子供たちと集落のばあちゃんので
小豆を植えるところから

おはぎを作ってみたいと思います。
あと何年一緒にできるか

わからないけど
集落のじいちゃんばあちゃんが

いるうちに
僕らが言葉で教えられないようなこ

とを

子供たちにはいっぱい学んでほしい
と思います。



これはおばあちゃんのかきもち。焚き火で焼いて食べます



時々、畑なんかを手伝いに行きます